

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02616

研究課題名（和文）幼児期から児童期を通した「造形遊び」における探究行動に関する質的研究

研究課題名（英文）A Qualitative Study on Children's Inquiry Behavior in Artistic Play Activities

研究代表者

村田 透（MURATA, Toru）

滋賀大学・教育学系・准教授

研究者番号：30469473

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は研究チーム(大学教員，小学校や保育の場の教職員，大学生)が子ども（幼児や児童）を対象とした「造形遊び」を題材開発，実践，観察，分析，考察する質的研究を行い，以下について明らかにした。子どもは「もの，こと，人」とかかわり，内的対話と外的対話をしながら表したいことに取り組む中で，問題を発見し，解決を試み，<自己>と<意味>を共起的に生成するという，「造形遊び」における探究行動特有の学習過程を明らかにした。「造形遊び」における探究行動特有の学習過程は，大人の「養護の働き」と「教育の働き」を支えとし，子どもが大人や友達らと協働的な社会を生成する中で展開することを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

(1)本研究が明らかにした「造形遊び」における探究行動特有の学習過程は，子どもが資質や能力を一体的に働かせて自らの見方，感じ方，考え方，表し方を生成する「生きる力」を育む姿を示している。(2)本研究が明らかにした「造形遊び」における探究行動特有の学習過程は，幼児や児童が大人や友達と学び合い，共に生きる社会をつくりだす姿であり，幼児期の教育と小学校との円滑な接続を実現するために資する。(3)本研究のアプローチ(大学教員，小学校や保育の場の教職員，大学生)による題材開発，実践，観察，分析，考察は，開かれた学校運営を通じた学びの共同体を実現する上で資する。

研究成果の概要（英文）：This study investigates children's inquiry behavior in artistic play activities. A research team consisting of university teachers, elementary and kindergarten teachers, and university students was formed to conduct qualitative research. The research team conducted the children's artistic play activities and recorded them with a video camera. In addition, the research team analyzed the relationship between children's play behavior and adults' educational support and care. The conclusions drawn from this study of children's artistic play activities are as follows.

In artistic play, children play with materials, tools, adults, and friends. They engage in conversations with others and internal conversations, discover subjects, and conduct problem-solving. In the process of problem-solving, coupled with educational support and care delivered by adults, children undergo self-development and semantic generation, thereby forming social groups where they can coexist with others.

研究分野：教科教育学（図画工作、美術）、幼児教育

キーワード：造形遊び 図画工作 幼児教育 探究 幼小接続 質的研究

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究でとりあげる「造形遊び」は、図画工作科「A表現」の内容の一つであり、昭和52(1977)年の学習指導要領改訂にて「造形的な遊び」として低学年に導入された。平成元(1989)年の改訂では低・中学年対象の「材料をもとにした造形遊び」となる。平成元年の改訂において「新しい学力観」が示され、「造形遊び」を「新しい学力観」に立つ図画工作科の中心的な内容として位置づけた。平成10(1998)年の改訂では全学年対象の「材料などをもとにして、楽しい造形活動をする(造形遊び)」,平成20(2008)年の改訂では「材料を基に造形遊びをする」,平成29(2017)年の改訂では「造形遊びをする」と名称を変えながら現在に至る(以降、「造形遊び」と統一して表記)。平成29(2017)年の改訂にて「造形遊び」とは、三つの質・能力(「知識及び技能」,「思考力,判断力,表現力等」,「学びに向かう力,人間性等」)を一体的に育成する意図的な学習と位置づけた。くわえて学習指導要領では、平成20(2008)年から平成29(2017)年の改訂に至るまで、学校教育現場における学習活動はコンテンツ・ベースからコンピテンシー・ベースへの転換を求めていることを示している。

図画工作科に「造形遊び」が導入されてから現在に至るまで40年以上経過するが、学校現場では停滞しているという指摘がある。阿部宏行(2016)の調査によると「絵や立体,工作」の実施率(各学年70%以上)に比べ、「造形遊び」の実施率は学年を追うごとに減少し、6年生は30%である。阿部は「造形遊び」の停滞の背景として、教員の多忙化・多忙感があり、教員は図画工作科において「明確な指導法」を求めることや「作品主義」の風土から、絵や立体など説明や指示がはっきりした活動に活路を見出す傾向があると指摘する。

その一方で、遊びを通した指導を中心とする幼稚園や保育所において「積み木遊び」「砂場遊び」などは日常的に実施されている。これらは、子どもが他者(大人や友達)との関係性のなかで、多様な材料・用具に思いのままにかかわり、自分で目的を見付けたり表現を工夫したりして遊ぶ特徴があり「造形遊び」と関連が深い。

ただし、幼児期から学童期の「造形遊び」において、子どもが資質や能力を働かせて「もの、こと、人」とかかわりながら表したいことに取り組み、問題を発見し解決を試み、自らが関与する学びを省察して価値づける探究行動に着目した学習過程について明らかにしていない。

### 2. 研究の目的

幼児や小学生を対象とした「造形遊び」において、以下3点を明らかにすることが目的である。

- (1) 幼児期や児童期の「造形遊び」における探究行動特有の学習過程
- (2) 幼児期から児童期を通した探究行動の質的変遷や連続性
- (3) 「造形遊び」題材に特有な探究行動、および題材相互の系統性や関連性

### 3. 研究の方法

研究目的を明らかにするために、学際的な諸理論(身体論,記号論,言語論,発達論,自己・他者論,構成主義の学習理論など)を援用して「造形遊び」における探究行動特有の学習過程に関する理論構築をする。くわえて、「造形遊び」の実践事例について相互行為分析やエピソード記述やエスノメソドロジーなどの現象学的アプローチを用いて探究行動特有の学習過程に関する質的分析を行う。現象学的アプローチは、研究チーム(大学教員,小学校や保育の場の現職教員,学部生や大学院生など)による「造形遊び」の題材開発,実践,観察,分析,考察である。

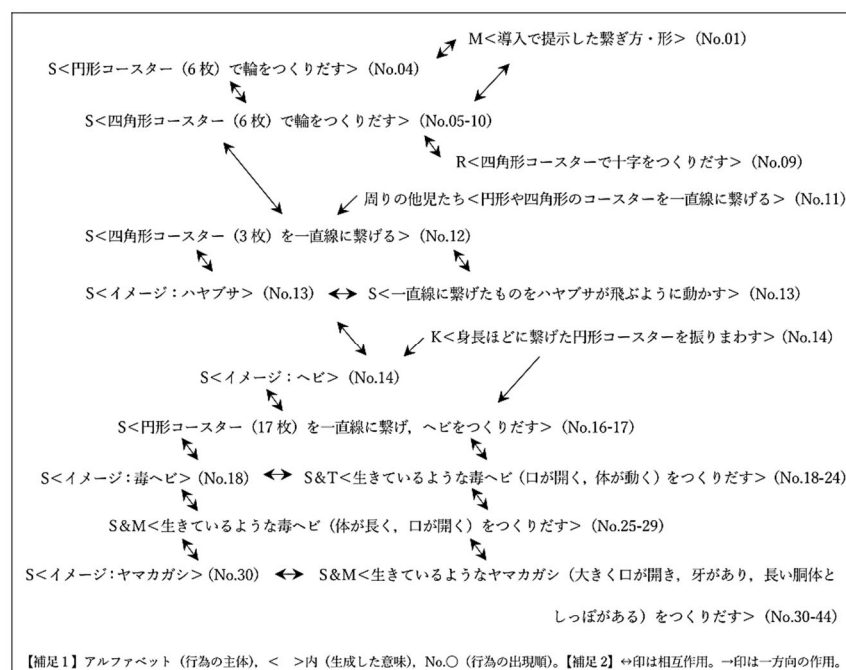
【表 1】本研究にて質的研究をした「造形遊び」の実践事例一覧

事例	【事例 1】幼稚園における時間外保育「繋げる行為から発想をして遊ぶ(コースターをジョイントとして)」	【事例 2】幼稚園における好きな遊びをする時間「石鹸クリームづくり」	【事例 3】【事例 4】小学校における造形遊び「紙コップをならべて、つんで、〇〇して」
場所	大阪府富田林市立錦郡幼稚園 遊戯室	滋賀大学教育学部附属幼稚園 中庭	滋賀大学教育学部附属小学校 大ホール
日時	2015年6月23日	2018年10月10日 「石鹸クリームづくり」は、幼稚園において 期(4,5月)から設定した遊びのコーナー	第1次:2019年6月14日 第2次:2019年6月21日 第3次:2019年6月28日
対象	幼児(年長児16名,年少児8名)	幼児(年長児49名) この遊びコーナーの参加者である3名を抽出	第6学年(34名) 全3回の題材における2名の児童を抽出
材料用具	ジョイントクリップ,紙製コースター,オクタクリップ,間接があるジョイントクリップなど	固形石鹸,ボウル,水,おろし器,泡だて器,スポンジ,容器など	紙コップ(白色無地,150ml,約15,000個),ワークシートなど
掲載論文	村田・新関・松本(2022) 【事例1】は,研究期間以前の事例であるが,本研究の目的を明らかにするために研究期間内に質的分析をし,論文投稿をした。	村田(2020a)	村田(2020b)

#### 4. 研究成果

##### (1) 幼児期や児童期の「造形遊び」における探究行動特有の学習過程

子ども(幼児や児童)は,他者(大人や友達など)との「能動 受動」の構図(浜田1999)のなかで,多様な「あいだ」(意識の表層と深層,自他二重性,自我二重性,過去・現在・未来など)を生きるアクチュアルな存在である(西野2000)。「造形遊び」において,子どもは多様な「あいだ」を生きながら資質や能力を一体的に働かせて「もの,こと,人」と相互作用・相互行為をし,自らの見方,感じ方,考え方,表し方をつくりだす。【図1】に示すように,子ども(S)は意味分節(井筒1985)をしてアクチュアルな<意味(イメージ,造形物・造形行為,他者,社会)>を生成するとともに,そのような<意味>をつくるアクチュアルな<自己(私)>を共起的に生成する学びをする。そのような<自己(私)>と<意味>を共起的に生成する学習過程において,子どもは思いのままに表したいことに取り組み,問題を発見し,解決を試み,自らが関与する学びを省察して価値づけるといふ探究をする(村田2022)。



【図 1】 子どもの<自己(私)>と<意味>の共起的生成(村田・新関・松本2022)

## (2) 幼児期から児童期を通じた探究行動の質的変遷や連続性

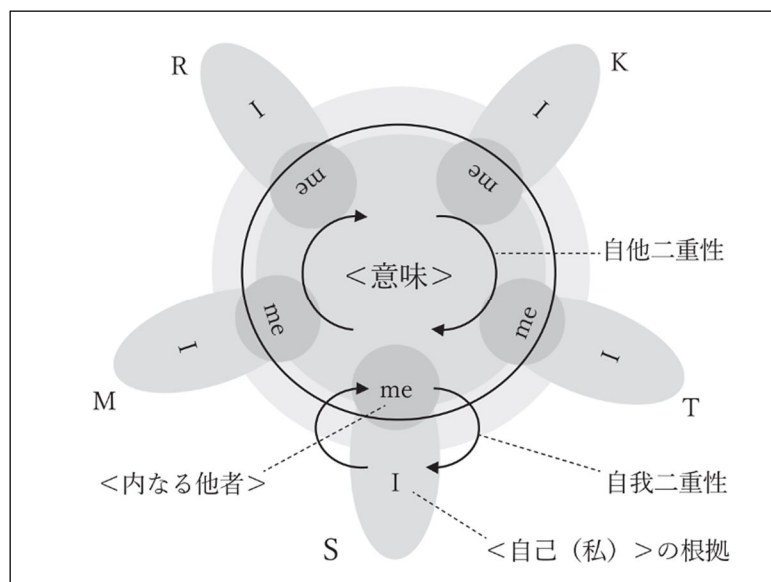
【表 1】で示す 4 つの実践事例を分析することで、研究目的(1)に応じた子ども（幼児や児童）の「造形遊び」における探究行動特有の学習過程について、多様な質を明らかにすることができた。ただし新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響により、2020 年度から 2023 年度まで「造形遊び」の実践を断念した。よって、研究目的(2)に関して、幼児期から児童期を通じた抽出児の探究行動の質的変遷や連続性について、明らかにすることはできなかった。

## (3) 「造形遊び」題材に特有な探究行動、および題材相互の系統性や関連性

「造形遊び」において子ども（幼児や児童）は、他者（大人や友達など）との「能動 受動」の構図のなかで、多様な「あいだ」(意識の表層と深層, 自他二重性, 自我二重性, 過去・現在・未来など)を生き、アクチュアルな<自己(私)>と<意味>を共起的に生成する学びをする。子どもが多様な「あいだ」を生きることは、<自己(私)>における「主我(I)」と「客我(me)」との対話という側面をもつ(G・H・ミード 1934)。【図 1】に示すように、子ども(S)は「主我(I)」と「客我(me)」との対話をすることで、多様な 意味 を生成する。【図 1】に示す多様な 意味 は、自我二重性(内的対話)と自他二重性(外的対話)を契機として、【図 2】に示す輪の内側において生成される。つまり、【図 1】と【図 2】は同時に相互に成り立つ。

子どもは、多様な 意味 を生成しながら思いのままに表したいことに取り組み、問題を発見し、解決を試み、自らが関与する学びを省察して価値づけるという探究をする。このような「造形遊び」における子どもの探究行動は、大人の「育てる働き(養護の働きと教育の働き)」（鯨岡 2013）に支えられた多様な他者（大人と友達など）との協働的な営みによって成り立つ（村田 2022）。

以上の「造形遊び」題材に特有な探究行動は、【表 1】に示す 4 つの実践事例において共通してみられ、題材相互の探究行動の関連性が明らかとなった。ただし、題材相互の探究行動の系統性に関しては、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響により、明らかにすることができなかった。



【図 2】子ども(S)と他者(大人：MやT，友達：RやK)との協働的な<自己>と<意味>の生成 (村田・新関・松本 2022)

< 引用文献 >

- ・ 文部省, 『小学校指導書図画工作編』, 日本文教出版, 1978
- ・ 文部省, 『小学校指導書図画工作編』, 開隆堂出版, 1989
- ・ 文部省, 『新しい学力観に立つ図画工作の学習指導の創造』, 日本文教出版, 1993
- ・ 文部省, 『小学校学習指導要領解説図画工作編』, 日本文教出版, 1999
- ・ 文部科学省, 『小学校学習指導要領解説図画工作編』, 日本文教出版, 2008
- ・ 文部科学省, 『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 図画工作編』, 日本文教出版, 2018
- ・ 阿部宏之, 「なぜ「造形遊び」は定着しないのか?」, 北海道大学岩見沢校芸術・スポーツ文化学研究編集部編 『芸術・スポーツ文化研究 2』, 大学教育出版, 2016, pp.65-85.
- ・ 村田透・新聞伸也・松本健義, 「「造形遊び」における子どもの問題解決 子どもと大人との協働的な関係性に着目して」, 『美術教育学研究』第 54 号, 大学美術教育学会, 2022, pp.353-360.
- ・ 村田透, 「造形遊び」における子どもの探究について-矛盾の構築と表現世界の形成過程との関係性-, 『美術教育学』第 41 号, 美術科教育学会, 2020 a, pp.335-352.
- ・ 村田透, 「「造形遊び」における子どもの探究行動 小学校高学年を対象とした「造形遊び」の事例より」, 『滋賀大学教育学部紀要』第 69 号, 滋賀大学教育学部, 2020 b, pp.61-76.
- ・ 浜田寿美男, 『「私」とは何か ことばと身体の出会い』, 講談社選書メチエ, 1999
- ・ 西野範夫, 「子どもの論理とつくること」, 上越教育大学美術研究誌 『美と育』No.5, 上越教育大学芸術系美術教育講座, 2000, pp.11-18.
- ・ 井筒俊彦, 『意味の深みへ』, 岩波書店, 1985
- ・ ジョージ・ハーバード・ミード (George Herbert Mead) 著, 植木豊訳, 「精神・自我・社会」(原著 1934 年, ミード没後出版, 講義録), 『G・H・ミード著作集成』作品社, 2018, pp.199-602.
- ・ 鯨岡峻, 『子どもの心の育ちをエピソードで描く 自己肯定感を育てる保育のために』, ミネルヴァ書房, 2013

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 村田透, 新関伸也, 松本健義	4. 巻 54号
2. 論文標題 「造形遊び」における子どもの問題解決 - 子どもと大人の協働的な関係性に着目して -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 美術教育学研究	6. 最初と最後の頁 pp.353-360
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田透	4. 巻 令和4年3月号
2. 論文標題 「フロントライン研究 子供がつくる問題発見・問題解決」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 初等教育資料	6. 最初と最後の頁 pp.76-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田透	4. 巻 70号
2. 論文標題 「造形遊び」における子どもの探究：「造形遊び」に関する現象学的考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 滋賀大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 pp.125-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田透	4. 巻 41号
2. 論文標題 「造形遊び」における子どもの探究について - 矛盾の構築と表現世界の形成過程との関係性 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美術教育学	6. 最初と最後の頁 pp.335-352
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田透	4. 巻 69号
2. 論文標題 「造形遊び」における子どもの探究行動 小学校高学年を対象とした「造形遊び」の事例より	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 滋賀大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 pp. 61-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 村田透
2. 発表標題 「造形遊び」における子どもの探究行動 小学校高学年を対象とした「造形遊び」の事例より
3. 学会等名 第58回大学美術教育学会 岐阜大会, 場所: 岐阜大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村田透
2. 発表標題 「造形遊び」における子どもの探究行動ー幼児期の「造形遊び」の事例よりー
3. 学会等名 第41回美術科教育学会 北海道大会, 場所: 札幌大谷大学・札幌大谷短期大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤絵里子, 大嶋彰, 新関伸也, 村田透, 塚本悦雄, 八嶋孝幸, 大島賢一, 山下暁子, 吉田奈穂子
2. 発表標題 美術科教育学会リサーチ フォーラム 共に考える2030年代の美術科教育における「造形遊び」の意義, 第3回「『造形遊び』を捉える複数のまなざし 指針の形成に向けて」
3. 学会等名 美術科教育学会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 大橋功, 新関伸也, 松岡宏明, 藤本陽三, 佐藤賢司, 鈴木光男, 清田哲男, 村田透, 他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本文教出版	5. 総ページ数 240
3. 書名 美術教育概論 (新訂版)	

1. 著者名 直江俊雄, 新関伸也, 縣 拓充, 若山育代, 池田吏志, 渡邊美香, 大島賢一, 竹内晋平, 中村和世, 村田透, 笠原広一, 大泉義一, 銭初薫, 徐英杰, リチャード・ヒックマン	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学術研修出版	5. 総ページ数 165
3. 書名 美術教育学 私の研究技法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	新関 伸也  (NIIZEKI Shinya)  (80324557)	滋賀大学・教育学系・教授    (14201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------